

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話 (521) 8494

核分裂発見五十周年

川崎 昭一郎

十月十六日、核分裂発見五十周年を記念するシンポジウムが東京・学士会分館でおこなわれた。主催者は「核兵器禁止をねがう科学者フォーラム」(代表世話人江口朴郎、小川岩雄、小野周、田畑茂二郎、三宅泰雄、一九七五年よりシンポジウムを開催、今回は通算六回目)および創立十周年を迎えた「原子力問題情報センター」(代表理事三宅泰雄、菊池渙治(元むつ市長、小野周)であった。

開会挨拶で三宅泰雄氏は、科学界の大転換期であった一九三〇年代を回想し、日本でも当時、仁科芳雄、木村健二郎の両氏が、中性子で照射されたウランの中で不思議なことがおこっていることに気付いていたこと、そして木村氏は、自らが発見したそのひとつウラン二三七に、十数年後にビキニの、死の灰をつうじて劇的に再会したことに触れた。

小沼通二(慶応大学)氏は、原子核の構造についての研究がすすみ、中性子の存在が明らかになり、核分裂反応

の発見にいたる道すじを整理して報告し、猿橋勝子氏は、発見の主役オットー・ハーンとリゼ・マイトナーの生い立ち、二人の共同研究、女性ゆえにリゼがうけた冷遇などを紹介した。中性子で照射されたウランが原子核分裂をおこしバリウムを生ずることを確認したハーンとシュトラスマンの研究結果は一九三八年十二月二日に『ナツールビッセンシャフテン』誌に投稿、翌年一月六日号に掲載され、ハーン達の結果に物理学的説明をあたえ、そのとき発生する巨大なエネルギーについても言及したマイトナーとフリッシュの論文は一九三九年一月十六日に『ネイチャー』誌に投稿、二月十一日号に掲載される。シンポジウムでは両論文(独文および英文)のコピーが配布された。

自然科学分野以外からは岩垂弘(朝日新聞社)氏が「原子力発見後の世界」と題し、国際政治の様相が一変して、小さい国を無視し、排除し、おどすことが平気でおこなわれるようになった

とのべ、核実験の必要からビキニ原住民はキリー島へ追いやられ、その後ビキニ島にかえってみたが五十年先まで住めない状態になっていたため、ふたたびキリー島へひきかえしたことや、オーストラリアのアボリジニもかつて追いこめられたゲットーが、地下にウランが埋蔵されているとわかったため、そこから追い出された事実をあげた。また、科学万能主義や大規模開発至上主義を生み出した反面、インテリジェンスの世界での環境破壊、極端な機密主義と警察国家的傾向をもたらしたと指摘した。岩垂氏は、パンドラの箱はあけない方がよかったのではなかったのか、核分裂の発見は人類にとって不幸な出来事ではなかったのかと結んだが、これは、シンポジウムでの活発な討論の引き金となった。

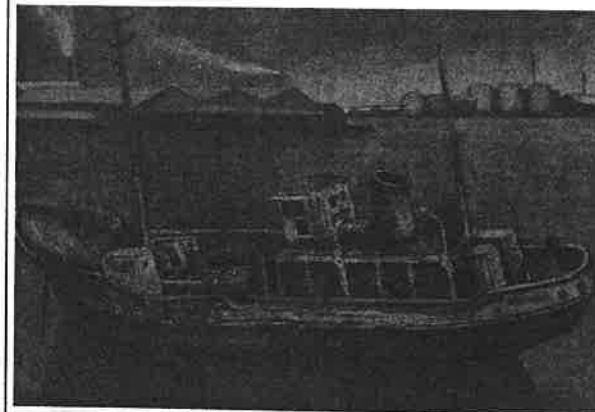
そのほかシンポジウムでは、山崎正勝(東京工業大学)氏がマンハッタン計画(原爆製造計画)と科学者のかかわりについて発表し、木越邦彦(学習院大学)氏が当事者として、戦争末期に理研の仁科研でおこなわれていた「ウラン爆弾の研究」の実際について紹介した。

(第五福竜丸平和協会理事)

第五福竜丸をとらえる……

作品紹介 ⑧
川上 貫一

川上貫一(一九二二年〜一九八五年、東京・文京区生まれ)が、



江東区深川に「アトリエ川上」を建てたのは、心臓病で急逝する五年前であった。下町を愛した彼は、地域に根ざした文化作りを始める。江東文化センターで毎年展覧会を開催し、江東美術クラブ(八二年)を作り、同区内の堀川公園に壁画(八四年)を描く。

川上の絵のスタートは四十歳と遅かった。安保闘争前後の紆余曲折の後、絵の道に進むことを決意し、「二日六時間、十年の目標」でデッサンに励んでいく。大野五郎氏に師事し、主体美術協会の会員になる。「山のセメント工場」「安▲第五福竜丸(不明)▲第五福竜丸(一九七六年頃)」

中の工場「石切場」：彼は、人気のない山あいの朽ちた工場を練り返し描いた。江東の昔ながらの工場地帯を愛する一方、東京湾に広がる埋立地も数多く描いている。人の工の土地は、どんなに華やいでも淋しげだ。その一種独特な雰囲気の中に建つ工場群、新木場貯木場や製材所……。彼の描く風景には働くものへの暖かいまなざしがいつも伝わってくる。



新木場の工場(1984年)
江東区仙台堀川公園の壁画(横5m、高さ2m)

本多副会長を退任
十一月八日、学士会館で協会の第八五回理事会がひらかれました。会務報告のあと、①今後の活動方針②展示館の修理拡充について③副会長の後任人事等について審議しました。①では英文・日本語のリーフレット及び絵はがきについて、それぞれ原案が示され、早急に作製することにしました(リーフレットは十二月末完成予定)。また②については、すでに二回にわたって行われた専門家による点検の状況が報告され、さらに調査・検討をすすめる、年度内に報告書をまとめ、東京都に要請していくことをきめました。副会長については、前回理事会の審議のうえにさらに討論を重ねたあと、本多理事を副会長に選任しました。また、理事・評議員の充足についても、次回理事会及び評議員会(一月三十日予定)で検討することになりました。

年間来館者十四万七千名
十一月十九日、夢の島熱帯植物館がオープン。開館記念式には協会から三宅会長、猿橋理事が出席しました。開館とともに展示館を訪れる人は一層増え、日曜日の来館者は五千人近くになっています。一九八八年の「龍」年も残りわずか。今年第十六回新春たこあげ大会(一月十五日)、三・一ビキニ事件記念集会(三月一日)、第五福竜丸平和協会設立十五周年記念集会(六月二〇日)などを開きました。一年間の来館者はおよそ十四万七千名、昨年来館者三万七千名を上回りました。

●第十七回新春たこあげ大会
一月十五日(成人の日)午前十一時
第五福竜丸展示館・夢の島グラウンド

平和随想 (三)

三宅 泰雄

政治家で、前首相の三木武夫氏が亡くなりました。

三木さんが池田内閣に入閣し、科学技術庁長官(国務大臣)となつたのは、一九六一年七月のことでした。

この年の秋に、それまで三年間、大気中の核実験を停止していたソ連が、最大規模の水爆実験を再開し、環境に甚だしい放射能汚染をもたらしました。その対策にお手上げとなった政府は、その十月に急遽、科学技術庁内に放射能対策本部を設け、次官通達で、今後は放射能汚染データの自由な発表を禁止し、対策本部で一括発表すると表明しました。それまでは、核実験による環境放射能の測定は、大学や研究所の科学者によって自発的に行なわれ、研究者同志で、お互いに意見を交換しながら進めていたのです。

私は、政府のこの決定は、その無策をおおいかくすためのもので、放射能汚染研究の発展を阻害するとして、きびしく抗議しました。

その月末には、ソ連実験による放射能汚染情報を新聞で発表し、その翌日からモナコの国際会議に出席のため出かけました。十一月はじめモナコから帰った私は、その翌日にまた気象学会の席上で、放射能雨の分析結果を発表し、政府決定に背反する行為をあえて行ないました。

これらのことから、私の行動は政府側の怒りを買ひ、そのころ兼任していた気象研究所が所属する気象庁の長官・和達清夫さんと呼ばれて、小言を言われるという一幕もありました。しかし、政府としても、結局は私の存在を無視はできなかったのか、私を放射能対策本部顧問の一人に指名してきました。

前述のように、そのときの科学技術庁長官は三木さんで、原子力委員長と放射能対策本部長を兼ねていました。おそらく、私を顧問の指名にふみきつたのは、三木さんの英断ではなかったでしょうか。三木さんは、その年の十二月に、私たち七人の顧問を、湯河原の天野屋という旅館に招き、大ごとになった放射能汚染への対策を、泊りがけで協議する会議を開きました。私たち顧問(塚本憲甫、田島英三、松山義夫、宮川正、森脇大五郎、西脇安、三宅泰雄)は、翌朝の九時から一日中、熱心に討論をつづけ、一応の結論に達しました。その夕刻から、三木本部長との会談がはじまり、午後七時半までつづきました。

三木さんはまず「皆さんの科学的良心にしたがって、率直に放射能対策案を示してほしい」と前置きし、顧問団との会談に入りました。これにたいし、私は「大事なことは、何よりも政府が核実験停止のために努力してほしいことだ。われわれは、後手、後手の尻拭いに忙殺させられている」と率直な意見を述べました。また、顧問団の意見として「まず妊産婦と幼児を、放射線から守ることが優先課題であり、そのためには、一例として天水を飲用としている地域に対しては、至急に対策を考える必要がある」などの意見が述べられました。これに対し、三木さんは真摯な面持で「日本の行政はいままで、この種の問題については、きわめて消極的だった。何とかして、もっと前向きな姿勢となるよう、至急に方策を考えたい」と答えました。

この「湯河原会談」後も、三木さんは国連に設けられた「原子放射能に関する科学委員会」(通称国連科学委員会、UNSCIEAR)に對しても、きわめて熱心でした。会議の度ごとに、わが国からも代表を送り、会議の成功を助けました。私も、三木さんに頼まれて、一九六二年のはじめ、ニューヨークで開かれた同委員会に出席しています。

三木さんは一九六二年七月で辞任し、そのあとに近藤鶴代さんが科学技術庁長官に任命されました。女性の大臣としては二人目で、放射能対策本部長としても、三木さんにつき、二代目でした。近藤さんは、早くに亡くなった私の姉と岡山高女、日本女子大時代からの無二の親友でした。近藤さんは私が対策本部の顧問であることを知って大変よろこび、ことあるごとに、かげでは「泰雄さん、泰雄さん」といつて科学技術行政の諸問題について、身近に相談してくれました。近藤さんにとっては、まるで縁のなかった仕事を担当したので、私がいたことは、いわば「天の助け」であったのかも知れません。その近藤さんも早く亡くなりました(一九七〇年)、こんどは私より一ヶ月前の三木さんも亡くなり、いまさらに四半世紀も前のできごとを思い起こし、なつかしさを禁じ得ません。

横浜市従と第五福竜丸

星 利夫

横浜市従業員労働組合(横浜市従)と第五福竜丸はかなり旧くからお互いに励ましあう親しい関係にあったようです。第五福竜丸は自らを保存するために、そして横浜市従は労働組合として常に生き生きとした運動をつくり出していくために、支援することは支援されることでもあります。

横浜市従は広島・長崎の原爆投下につづく一九五四年の水爆実験により被害を受けた第五福竜丸を、原水爆禁止運動の中で忘れることなく今日まできました。一九五六年の伊勢での改修工事に注目しつつ、組合として広く大きくかわりを持つようになったのは一九六七年から始まる保存運動からです。東京夢の島に繋留されていた第五福竜丸は、船体処分され閣から閣へ葬り去られようとしていたその時、都職労港湾分会はじめ、労組・民主団体、平和を愛する個人によって保存運動がすすめられました。この運動に横浜市従は積極的に参

加してきました。たまたまこの運動を自己の人生とともに取組んでいた広田重道氏が神奈川県に住んでいたこともあり、同氏や被爆者を招き各所で学習会を開き、併せて保存のためのカンパ活動を取組みました。

一九七〇年にはいり、基地県神奈川の労働組合としてベトナム反戦のたたかきもあり、カンパ活動は第五福竜丸、ベトナム侵略戦争反対、被爆者援護の三本柱で空かんカンパなども工夫され恒常的取組みとなりました。また保存運動中から、東京の第五福竜丸を見学することも度々でした。誰しも願うとして持っている平和の心への琴線の響きは、第五福竜丸を見ることによって一層強くなるからです。横浜市従は労働組合です。言うまでもなく労働組合は主義、主張や政治的立場によらず組合員の要求で団結している組織です。革新統一こそ必要であり一九六三年の原水禁運動の分裂などは不幸なで

きごとであり、組合にとっても大きな損失です。その中で横浜市従としても苦しみました。苦しみつつ平和・原水禁運動への取組みの強化が求められました。そして、誰でも否定できないこと、核兵器の廃絶・全面禁止、被爆者と共にすすめる援護・連帯の運動などを地道にねばり強く取組んできました。第五福竜丸保存運動もその一つです。いろいろな政治的立場、考えの違いはあっても、保存運動を否定する人はなく、統一した運動として取組めたからです。

横浜市従は労働組合として、平和の取組みを積極的に行っている組合の一つです。(私のように運動の浅い者もこのことは誇りです。)組合に一機関として「平和と国際連帯委員会」を設置し、毎月定期的に会議を開き取組みを話し合っているのもその一つのあらわれです。表には裏がありません。悩みはなんといっても委員会に担当者の参加の少ないことです。労働組合は賃金をはじめ労働条件にたいするたたかき中心で、ともすれば平和への具体的取り組みは後景に追いやられてしまふのが実情です。誰でも参加でき、楽しく、ために

なるそして、参加してよかった、と思える平和のとくみをどうすればつくられるかが、大きな課題です。

今年も三月に焼津、八月に広島とそれぞれ参加しました。来年は市従で何かやりたいと考えています。代表団の現地での奮闘と連帯する行動。例えば、三・一ビキニデーには第五福竜丸見学、原水禁世界大会には連日横浜の各地で署名行動など。実現すれば、第五福竜丸見学は市従として五年ぶりです。

私が平和運動にかかわるようになって参加した最初の大きなたたかきも三・一ビキニデーであったように記憶しています。焼津で、久保山さんの墓前で、あのことは胸にきざみ核兵器は絶対になくさなければならぬと思えました。十の米軍基地をかかえる横浜。厚木、横須賀も近く、神奈川は基地県です。自治体の労働組合として憲法・地方自治法の積極面を生かし、「住民及び滞在者の安全、健康及び福祉を保持すること」を具体的にすすめていく決意です。

(横浜市従業員労働組合 平和と国際連帯委員)